26　馬匹　大木正樹

大正十二年（一九二三）
油彩・キャンヴァス
本紙八〇・七×一一六・九

一面

厩舎と思しき建物の前でたたずむ一頭の馬。皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王の御成婚奉祝のため、大木正樹（生没年不詳）より献上された作品である。作者の大木は、陸奥国（福島県）田村郡出身の旧三春藩士で、幼い頃より絵を好み、父に禁じられながらも絵の勉強を続けたという。明治三十四年（一九〇一）の陸軍特別大演習に際し、「河岸嘯虎ノ画」を描いて天覧に供し、所属部隊より褒状を受けたこともあったという。日露戦争において負傷したために退役し、以後は洋画家として身を立てた（『大正十三年御婚儀録五　東宮職』宮内公文書館蔵）。大木の父は三春藩の馬奉行を務めた人物であり、そもそも三春藩は馬産を主要な産業としていた藩であったことを考えると、大木にとって馬は生まれた時から非常に身近な存在だったと言えよう。三春産の馬、いわゆる三春駒は、数少ない日本在来馬種であり、明治天皇の御料馬にも友鶴号という三春駒がいた。

本図は、顔は小さく四肢は長くスマートな体型の外来種の馬を描く。大正期、御料牧場で飼育される馬や御料馬はその多くが外来種であった。大正十一年から十三年まで、皇太子の御料馬として関東大震災の被災地御視察等で活躍した山吹号も栗毛のサラブレッドであったが、本図はこうした皇室ゆかりの馬をモデルにしている可能性もあろう。

また本図は、絵の具層の下に七・六センチ間隔で縦と横に罫線が引かれていることが、赤外線撮影によって判明しており、これは小さな図版を引き伸ばして描くための見当線だったと思われる。やや硬直な画風からも、本図は写真を原図に用いた可能性が高いであろう。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

駒競べ（こまくらべ）——馬の晴れ姿
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 73

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年七月九日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan